



Title	国際バカロレアの求める言語力
Author(s)	小澤, 伊久美
Citation	母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究. 2018, 14, p. 1-14
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/72145
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

≪ 寄稿 ≫

国際バカロレアの求める言語力

小澤 伊久美 (国際基督教大学)

ozawa@icu.ac.jp

The Language Competency that International Baccalaureate Programme Aim to Develop

Ikumi Ozawa

要 旨

本稿では、国際バカロレア (The International Baccalaureate, IB) のプログラムにおいて言語がどのように捉えられており、IB がどのように児童生徒の言語力を育もうとしているかを紹介した。IB において言語は、児童生徒の発達の基盤として捉えられている。言語は児童生徒が他の文化を認め、理解し、文化的多様性を尊重する意識を育むための基盤となる。また、人格的成長やアイデンティティの模索と維持に不可欠なものである。そして、言語は意味を構築し、概念形成を支える知的枠組みをもたらすと考えられている。そのため、言語は、リテラシーやマルチリテラシーの発達にも不可欠で、生きる力の獲得に結びつくものとされている。言語は、すべての学習に統合されたものとして捉えられており、IB のプログラムでは、語学教師のみでなく、すべての教師が児童生徒の言語の発達に責任を持つとされている。その意味で、概念理解、批判的思考、探究が、IB のカリキュラムと指導において重要な役割を担っている。

Abstract

This paper discusses the role of language in International Baccalaureate (IB) programme and describes what language competency they aim to develop and how they cultivate it. Language is treated as the basis for students' development. It is fundamental to foster students' awareness to appreciate and understand other cultures and respect the cultural diversity. In addition, language is essential for students to seek and maintain their personal development and identities. Also, language is essential in the construction of meaning and provides an intellectual framework to support conceptual development. Thus, language is imperative for the development of literacy and

multiliteracies, which empower students to live. The IB assume language to be integrated to all the learning and that not only language teachers but all teachers are responsible for language development of students. In this sense, conceptualization, critical thinking, and inquiry play important role in the curriculum and pedagogical approach in IB.

キーワード：国際バカロレア、言語、すべての教師、概念理解、探究

1. はじめに

国際バカロレア (International Baccalaureate: IB) は、1968年にスイスのジュネーブで設立された非営利の教育財団国際バカロレア機構によって設置された総合的な教育プログラムである。世界の複雑さを理解し、対処できる生徒を育成し、未来へ責任ある行動をとるための態度とスキルを身につけさせること、国際的に通用する大学入学資格である国際バカロレア資格 (IB フルディプロマ) を与えて大学進学へのルートを確認することを目的としている (国際バカロレア機構, 2017b)。

日本でも IB は高く評価されており、1979年には、IB フルディプロマ所持者である18歳以上の者には高等学校卒業者と同等以上の学力があるとして大学入学資格が認められている (国際バカロレア機構『国際バカロレアを大学入学審査に生かす』)。また、現在、日本政府はグローバル人材育成の観点から IB の普及・拡大を推進しているが、それをきっかけに、IB が、生徒の主体的に学ぶ意欲と探究心を培い、高い知性と幅広い教養、自らの意見を的確に発信する力、鋭い国際感覚、深い洞察力、豊かな人間性を育成することを目指している点に改めて注目が集まっている (東京都教育委員会, 2013, 2014など)。また、IB の求める言語力についても、例えば「日本語A」に焦点をあてて具体的なカリキュラムの立て方や指導の方法を取り上げた論考も出てきた (半田, 2017)。

しかし、未だに、IB が2言語以上で幅広いコミュニケーションの方法を学ぶことを多様な文化を理解するために欠かせない重要な基盤と位置づけていること、すべての教師を「言語の教師」と位置づけ、生徒の多様な言語的背景や教室の多言語的な学習環境を踏まえて生徒の言語力を育成するよう求めていることはあまり知られていない。そこで本稿では、IB の求める言語力が何かを、Diploma Programme (DP)¹⁾を中心に論じることとする。

2. IB DPのカリキュラム概要

DP には、「コア (Core)」と呼ばれる必修要件の科目があり、コアは表 1 に挙げた「課題論文 (Extended Essay: EE)」「知の理論 (Theory of Knowledge: TOK)」「創造性・活動・奉仕 (Creativity/Action/Service: CAS)」の 3 つからなる (国際バカロレア機構, 2015b)。

表 1 DPのコア科目

科目	概 要
課題論文 (EE)	履修科目に関連した研究分野について個人研究に取り組み、成果を4,000語 (日本語の場合は8,000字) の論文にまとめる。
知の理論 (TOK)	「知識の本質」について考え、「知識に関する主張」を分析し、知識の構築に関する問いを探究する。批判的思考を培い、生徒が自分なりのものの見方や、他人との違いを自覚できるよう促す。最低100時間の学習。
創造性・活動・奉仕 (CAS)	創造的思考を伴う芸術などの活動、身体的活動、無報酬で自発的な交流活動といった体験的な学習に取り組む。

生徒はコアの他に、表 2 に掲げた 6 つのグループから各 1 科目を選択し、計 6 科目を 2 年間で履修する。(ただし、グループ 6 は他のグループからの科目に代えることも可能。) 6 科目のうち、3～4 科目を上級レベル (Higher Level: HL、各 240 時間)、その他を標準レベル (Standard Level: SL、各 150 時間) で学習する (国際バカロレア機構, 2015b)

表 2 DPの 6 つのグループ

グループ名	科 目
1.言語と文学	言語A: 文学、言語A: 言語と文学、文学とパフォーマンス (SLのみ) ^{※1)}
2. 言語習得	言語B、初級外国語 [ab initio] (SLのみ)、古典言語
3. 個人と社会	ビジネス経営、経済、地理、グローバル政治、歴史、情報テクノロジーとグローバル社会、哲学、心理学、社会・文化人類学、環境システムと社会 ^{※1)} 、世界の宗教 (SLのみ)
4. 理科	生物、コンピューターサイエンス、化学、デザインテクノロジー、物理、スポーツ・運動・健康科学 (SLのみ)、環境システムと社会 ^{※1)}
5. 数学	数学スタディーズ (SL)、数学 (SL)、数学 (HL)、数学 (Further Higher Level: FHL)
6. 芸術	ダンス、音楽、フィルム、文学とパフォーマンス ^{※1)} 、美術

※はグループ横断科目

この6つのグループのうち、グループ1とグループ2は言語科目である。グループ1は生徒にとっての母語²⁾の学習で、「当該言語を学問的な文脈で使用したことのある生徒」(国際バカロレア機構, 2014c, p.27)を対象にしている。グループ1「言語と文学」には、「言語A: 文学」「言語A: 言語と文学」、「文学とパフォーマンス」の3つの科目があるが、どれも「高いレベルの言語能力とコミュニケーションスキルに加え、社会的、美的、文化的リテラシーを高めることを通じて、生徒の将来の学問的な営みをサポートするように」デザインされている(国際バカロレア機構, 2014c, p.5)。また、これらの科目は焦点を置く点が異なり、取り扱うテキストにも大きな違いがあるものの、言語の使用、分析、批判的な振り返りの到達目標レベルは同一である(国際バカロレア機構, 2014c p.6)。生徒は、文学作品・非文学作品などのテキストを「形式」「内容」「目的」「読者」などの要素を通じて理解し、さらに、テキストを生み出し価値づける社会的、歴史的、文化的文脈、あるいはテキストが生成される特定の状況といった文脈を通じて理解し、文化の中において言語が意味を生成する様相に関して理解を深める観点を身につけるよう促される。そして、テキストとの対峙あるいはテキストの創造といった行為を通じて、「言語がいかに関心や思考方法やもののあり方を維持しているか、あるいは反対に、言語がいかに関心や思考方法やもののあり方に挑戦しているかについての理解を深める」よう促されるのである(国際バカロレア機構, 2014c p.5)。IBはこうした母語の教育を非常に重視しており、学校が指導のために選択した言語が何であれ、IBは学校に、生徒が自らの母語で「言語A」を履修できるように複数の「言語A」科目を提供する環境の整備を求めている³⁾。

グループ2は言語の習得で、「言語B」は当該言語をある程度学んだ生徒、「初級外国語(ab initio)」は当該言語を学んだ経験がまったくない、もしくはほとんどない生徒が対象の科目である。どちらの科目も、生徒に、ターゲットの言語が用いられている環境で十分にコミュニケーションするのに必要なスキルと他文化理解力(Intercultural understanding)を培うことを目的とし、生徒が他の文化を認め、理解し、文化的多様性を尊重する意識を育む国際的な視野を育むよう促している(International Baccalaureate Organization, 2013, p.4)。また、語彙、文法、レジスター(言語使用域)、発音およびイントネーションの習得、そして受容能力(Receptive skills)、表出能力(Productive skills)、対話能力(Interactive skills)をバランスよく磨くことが重要だとされている(International Baccalaureate Organization, 2013, pp.4-6)。

3. IB の言語の捉え方

前節で紹介したような形で言語科目のカリキュラムが構成されているのはなぜか。本節では、IB のカリキュラムの背景にある IB の言語の捉え方をみてみたい。

IB には、学習における言語の役割を理解するための枠組み、および児童生徒の多言語能力を育てるための IB プログラムの枠組みを説明した文書があるが、その冒頭の「セクション1 言語の役割」は、以下のウォーフの言葉の引用から始まっている（国際バカロレア機構, 2014d, p.3）。

すべての言語は、文化的につくられた形態やカテゴリーを包含する広大なパターンの体系であり、その体系はそれぞれに異なっている。人間が言語を通して行うのは意思疎通だけではない。人間が物事の本質を分析する時、ある現象や関係性に気づく時やそれを無視する時、推論を導く時、自身の意識を形づくる時、そこにはいつも言語が存在する。

その上で、言語は、単なるコミュニケーションのツールではなく、人間の生きる世界に多様な形で関わっていると指摘している（国際バカロレア機構, 2014d, p.3）。

言語能力の発達には、私たちが本能的に必要とする「コミュニケーションをとる」という行為の根源的要素であり、人格的な成長やアイデンティティの模索と維持にも不可欠です。言語とは、社会的につくられるものであり、私たちがどのように、またどれだけ社会的に人と交流し、関係を築くかに影響されます。個人的な話し方、表現の仕方や考え方は、社会と関わるプロセスを通じてさらに発展していきます。また、言語は社会的な規範や期待を伝達することにより、社会化における重要な力となって、人との具体的な交流を形づくりします。その結果として、私たちは文化的アイデンティティを形成します。言語は、私たちの思考も形づくりします。例えば、特有の対話や^{ディスコース}談話のパターンが、特定の学習プロセスや認知プロセスに作用します。また言語は、意味の構築においてきわめて重要な役割を果たし、概念の形成を支える知的枠組みをもたらします。

このような理解から、IB では、言語は、基本的な読み書きの能力であるリテラシーやマルチリテラシーの発達にも不可欠で、生きる力の獲得に結びつくものと位置づけ

られている（国際バカロレア機構, 2014d, p.3）。

IBではコミュニケーションにおける言語の役割も重視されている。「IBの学習者像(The IB Learner Profile)」⁴⁾の1つに「コミュニケーションができる人(Communicators)」があるが、そこには「私たちは、複数の言語やさまざまな方法を用いて、自信をもって創造的に自分自身を表現します。他の人々や他の集団のものの見方に注意深く耳を傾け、効果的に協力し合います。」と記されている。しかし、IBは決して複数の言語を学習すれば自動的に多文化理解や国際的視野が育めると考えているわけではない。ホールの以下の言葉を引いた上で、「多様な文化の理解、国際的な視野、グローバルな社会の一員としての意識を育む」上で、批判的思考(critical thinking)が欠かせないことを指摘しているのである（国際バカロレア機構, 2014d, pp.3-4）。

別の文化を理解することは、二分法的な古い考え方（「私たち」対「彼ら」）を乗り越えるという本来の意図とは裏腹に、新たな自民族中心主義や権力行使に容易に陥ってしまう可能性を孕んでいる。したがって、このような二分法的な捉え方や自己理解を見直すことを促すような指導ができるかどうかが重要になる。

一方で、IBは、その児童生徒の言語的背景が多様であり、同じ個人においても一つの言語が他の言語よりも優勢であることがあると認識している。教室は、このような児童生徒の集まる多言語的な学習環境だが、教室のこのような状況は、今後より一層当然のものになっていくと考えている（国際バカロレア機構, 2014d, p.2）。

また、「多言語性(multilinguality)」について、オリーレとアロニンによる以下の定義を紹介し、「多言語性は、行動、知覚、態度、能力によって表され（中略）単なる言語的な機能ではなく、身体的・認知的・文化的・社会的特質を介して表れるものである」と指摘しており、多言語主義(multilingualism)に基づき、言語領域を連続したつながりとして捉えていることを明らかにしている（国際バカロレア機構, 2014d, p.6）。

（多言語性とは）どのような熟達度の言語も含む、個人の言語の総体のことである。部分的な言語能力や不完全な流暢さをはじめ、メタ言語認識、学習方法や学習に対する意見、好み、受動的・能動的言語知識、言語使用、言語学習、言語習得のすべてが含まれる。

この考え方は、「IBにおけるすべての言語学習の土台であり、異なる言語の各領域の発達に差異があり得ると考える IB の言語学習観を反映する考え方」（国際バカロレア機構, 2014d, p.6）で、IB における言語の指導計画、言語的背景の理解、指導方法、そして評価方法に密に関わるとされている。例えばガルシアの「多言語話者の言語実践は相互につながり合っているため、言語は所有するものではなく使用するものと捉えるべき」であり、「学習者は身につけた新たな言語実践を非常に複雑でダイナミックな多言語レパートリーに統合していく」という考えや「トランスランゲージング (translanguaging)」という概念などを紹介している（国際バカロレア機構, 2014d, p.10）。

そして、先行研究や実践を踏まえ、多言語教育が社会的少数派の子どもたちの個人的アイデンティティを育むとともに自尊心を高めることにつながり、自尊心を高めることは、動機づけや学習に好ましい影響をもたらすこと、多言語教育が文化的・社会的アイデンティティを肯定的に強化するものであると認識されており、例えば世代間の摩擦を減らしたり、出身地とその文化に対して社会的なつながりを維持したりする効果があることを指摘している。また、多言語教育によって第一言語の読み書きの能力が強化されると、そのスキルを転移 (transfer) することで他の言語における学習言語の能力が高められること、国際的な視野や多様な文化の理解を促進することなどの利点に言及している（国際バカロレア機構, 2014d, p.16）。

4. IBにおける言語学習の指導の ^{アプローチ}方法

前節で指摘したことがらを踏まえ、IBは、言語学習の指導の方法は次の3つの要素を伴うものでなければならないとしている（国際バカロレア機構, 2014d, p.4）。

- ・誰にでも開かれた「インクルーシブ」なものであること
- ・学習者個人のアイデンティティと自主性を肯定するものであること
- ・批判的思考を促すものであること

IB は、3つ目の批判的思考を「文章や議論、意見などで示されたことをただ受け入れるのではなく、それらを振り返り、考え、分析することを通じて、自分自身の判断を形成すること」、「信念をもつに至った理由やその意味を探究し、理解する事」であるとしている（国際バカロレア機構, 2014e, p.17）。IB が批判的思考を重視していることは、例えば「課題論文」の評価基準⁵⁾において、批判的思考の評価点が34点満点中12点配分されて5項目中で最も重みづけされていることから明らかである。

また、言語の「指導」と「学習」を計画する際の参考として、言語と学習の領域の

連続したつながりを表3のように分類し、図1のようなモデル⁶⁾として図示している(国際バカロレア機構, 2014d, pp.28-37)。

表3 言語と学習の領域の分類

「言語の学習」に重点	「言語を通じた学習」に重点	「言語についての学習」に重点
個別のスキル	認知学習言語運用能力 (CALP)	文学分析
基本的対人伝達能力(BICS)	—	批判的リテラシー
基本的な読み書きの能力 (リテラシー)と言語表現	—	—

この言語領域の連続したつながりは、「包括的で全人的な学習の中で相互につながり合っているものとして捉える必要」があるが、指導の際にどの領域に重点を置くかを考えることは短期的・長期的な学習に向けた計画づくりに役立つとしている(国際バカロレア機構, 2014d, p.36)。

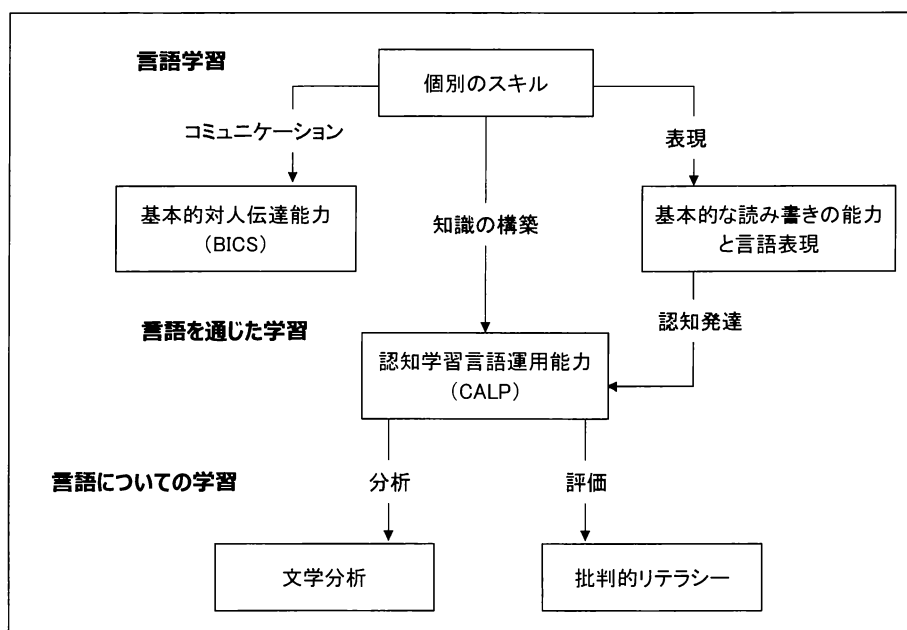


図1 さまざまな言語領域にわたる言語の役割

出所: 国際バカロレア機構, 2014d, p.36

このように、言語は、学校における実りある学習と切り離せない関係にあり、すべての学習に統合されたものとして捉えられている。そのため、言語力の向上は語学教師のみが担うものではなく、「すべての教師が言語の教師」としての役割を担うとされてい

る（国際バカロレア機構, 2014d, p.42）。そして、効果的な指導を実践するためには学校全体の協働が必要であるとして、学校にIBの原則と実践に則った言語方針を明文化することを求めているのである（国際バカロレア機構, 2014d, p.42）。

5. 概念と探究に基づくIBの指導

DPだけでなくすべてのIBプログラムには、「指導の^{アプローチ}方法（Approaches to teaching）」と呼ばれる、教え方の基盤が以下のように示されている（国際バカロレア機構, 2015a, 2016a, 2016b）。

- ・探究を基盤とした指導
- ・概念理解に重点を置いた指導
- ・ローカルとグローバルな文脈でとらえる指導
- ・効果的なチームワークと協働に重点を置く指導
- ・すべての学習者のニーズを満たすために差別化した指導
- ・評価を取り入れた指導

このうち、児童生徒の批判的思考の発達を可能にしているのが、「概念理解」と「探究」を中心としたカリキュラムと指導である。IBのプログラムにおいて、「生徒は概念によって、事実やトピックと言うレベルを超えた思考を示すよう求められて」いる（国際バカロレア機構, 2016a, p.18）⁷⁾。これらの概念は、その単元で生徒が理解すべきこととして、PYPでは「中心的アイデア（central idea）」、MYPでは「探究テーマ（statement of inquiry）」、DPでは「転移の目標（transfer goals）」という用語で明文化される⁸⁾。児童生徒がこれらを深く理解できるように、教師には質の良い問いを投げかけ、子どもたちを調査、実験、経験、論理的思考へと誘う。子ども一人ひとりが批判的、創造的な回答に至るまでのプロセスこそが探究の道のりであり、探究のプロセスにおいて子どもたちは言語を習得していくと考えられる。明文化された概念が最終的にどれほど理解できているかは、総括的評価において評価される。

PYPでは、各教科および教科を横断して関連性のある概念が提供される。例えば「重要概念」と呼ばれる概念には「特徴・機能・原因・変化・関連・視点・責任・振り返り」の8つがある。「探究の単元」（複数の教科間で行う探究の単元）、あるいは教科だけの独立した単元でも、概念に基づくオープンエンド型の「重要な問い」（国際バカロレア機構, 2016b, p.20）によって「計画化された探究を通して」児童を深い理解に導く（国際バカロレア機構, 2016b, p.8）。「重要な問い」は、「調査、議論、詳細か

つ熟考された返答を求めるもので」(国際バカロレア機構, 2016b, p.87)、児童生徒の批判的思考を育む根幹をなしている。

MYP では、「美しさ」、「変化」、「コミュニケーション」、「コミュニティ」、「つながり」、「創造性」、「文化」、「発展」、「形式」、「グローバルな相互作用」、「アイデンティティ」、「論理」、「ものの見方」、「関係性」、「システム」、「時間、場所、空間」といった16の「重要概念」がある(国際バカロレア機構, 2016a, p.67)。教科ごとに、それらの中のいくつかが取りあげるべき概念として定められている。また、各教科の単元に深さをもたらす「関連概念」は他の「重要概念」からさらに適切なものを取り入れるか、あるいは、それら以外のものをとりあげても良いことになっている。ここでも教師による問かけが子どもたちを深い概念理解へと導く鍵になっている。

DP では教科を越えて共通の概念は提示されないが、それぞれの教科の「指導の手引き」には、教えることが期待されている概念についての詳細な記述が見られる。問かけは明示されてはいないが、IB のユニットプランナーを見ると、DP においても教師には良質の問かけをすることが求められていると言えるだろう。

IB の学習者の多くは、多様で複雑な言語的背景を持っており、結果として、多くの学習者が上述のようなカリキュラムの大部分を母語以外の言語で履修する形になる。そのため、IB は学校に、こうした状況が学習に及ぼす具体的な影響を十分理解し、母語以外の言語で履修している学習者を含めたすべての「学習者の多様性の価値を失わず、すべての学習者がカリキュラムで計画された学習に等しく参加でき、学校が設置している環境と実践の基準が全員にとって実りある指導・学習環境を育むものである」ようにすることを求めている(国際バカロレア機構, 2014a, p.2)。

そのような環境において児童生徒を複数の言語に熟達し、読み書きにも優れた知識豊富な多言語話者に育てる取り組みについて、IB には次のような基準がある。

- ・学校は、生徒の母語、学校所在地の言語、その他の言語を含めた言語学習を重視すること
- ・「協働設計」と「振り返り」は、児童生徒の言語能力の発達にすべての教師が責任を負っていることを認識して行われること
- ・「指導」と「学習」は、母語以外の言語で学習している児童生徒のニーズを含め、言語に関する児童生徒の多様なニーズに対応するものであること
- ・「指導」と「学習」は、児童生徒の言語能力の発達にすべての教師が責任をもって取り組んでいるものであること
- ・学校は、プログラムを支援するための方針と手順を策定し、実施すること

そして、「学習者の多様性にあふれた多言語的、多文化的、多面的属性は、学習を進め批判的リテラシーを身につける上でのリソースであるという認識」から、IB では「言語学習と多言語主義、そして批判的リテラシーの育成が、IB の使命である多様な文化の理解と国際的な視野を育むための重要な要素であると捉え」ているのである (国際バカロレア機構, 2014d, p.12)。

6. おわりに

本稿では、IB のプログラムにおいて言語がどのように捉えられており、IB がどのようにに児童生徒の言語力を育もうとしているかを紹介した。IB において言語は、児童生徒の発達の基盤として捉えられている。言語は児童生徒が他の文化を認め、理解し、文化的多様性を尊重する意識を育むための基盤となる。また、人格的成長やアイデンティティの模索と維持に不可欠なものである。そして、言語は意味を構築し、概念形成を支える知的枠組みをもたらすと考えられている。そのため、言語は、リテラシーやマルチリテラシーの発達にも不可欠で、生きる力の獲得に結びつくものとされている。言語は、すべての学習に統合されたものとして捉えられており、IB のプログラムでは、語学教師のみでなく、すべての教師が児童生徒の言語の発達に責任を持つとされている。その意味で、概念理解、批判的思考、探究が、IB のカリキュラムと指導において重要な役割を担っているのである。

こうした IB の理念を実際の教室で具現化するためには、カリキュラムを解釈し、具体化し、実施する個々の教師が重要な鍵を握っている。IB の「指導の手引き」などには、目標が明示され、評価の方法も詳述されており、また、その目標達成までの段階や実践可能な方法が具体的に示されているが、各国の教育事情、各教育機関の状況、児童生徒のありように応じてカリキュラムを効果的に遂行するために、教師にはかなりの自由と責任が与えられているからだ。

IB は、そうした教師らへの支援として「指導の手引き」や最新の研究成果や理論などを反映させた「教師用参考資料」を数多く提供している他、ワークショップを開催するなど教師の専門性を高める手立てを提供している。また、IB は、教師らによる国際バカロレア機構へのフィードバック、試験官やワークショップリーダー、カリキュラム開発委員会メンバー、地域組織メンバーとして IB の活動に関わることなどを奨励しており、IB 関係者全体でよりよいプログラムを作り上げる仕組みとしているのだが、その関わり合いの中で教師の学びも促されている。IB の求める言語力を子ども達の中に

育くむためには、IB を単に導入するのではなく、教師個々人が努力を積み重ね、教師同士の学び合いなどをさらに活発に進めていく必要があると言えるだろう。

注

- 1) IBは年齢に応じてPrimary Years Programme (PYP)、Middle Years Programme (MYP)、Diploma Programme (DP)、Career-related Programme (CP)という4つのプログラムを提供している。4つのプログラムの対象等は以下の通りである(国際バカロレア機構, 2017b)。
 - ・ PYP: 3歳～12歳までを対象としており、精神と身体の両方を発達させることを重視しているプログラム。児童は「私たちは誰なのか」、「私たちはどのような場所と時代にいるのか」、「私たちはどのように自分を表現するのか」、「世界はどのような仕組みになっているのか」、「私たちは自分たちをどう組織しているのか」、そして「この地球を共有するということ」という6つの教科横断的テーマを探究する。どのような言語でも提供可能。
 - ・ MYP: 11歳～16歳までを対象としており、青少年に、これまでの学習と社会のつながりを学ばせるプログラム。生徒は「アイデンティティーと関係性」、「個人的表現と文化的表現」、「空間的・時間的位置づけ」、「科学技術の革新」、「公平性と発展」、そして「グローバル化と持続可能性」という6つの教科横断的テーマを探究する。どのような言語でも提供可能。
 - ・ DP: 16歳～19歳を対象としたプログラムで、6つの教科と3つの「コア」の必修要件で構成される。「コア」のうちの1つ「知の理論 (TOK)」では、「私たちが知っていることをどのように知るのか」という根源的な問いに対する探究を通して、生徒が自身のもっている観点と仮定に対してより認識を深める。所定のカリキュラムを2年間履修し、最終試験を経て所定の成績を収めると、国際的に認められる大学入学資格である国際バカロレア資格が取得可能。DPは、原則として英語、フランス語又はスペイン語で実施するものであるが、2016年より一部の科目を日本語でも実施可能とする「日本語DP (Dual language DP with English and Japanese)」が導入されている。なお、教授言語を何語にしてDPを実施するかは各学校の裁量に委ねられている。
 - ・ CP: 16～19歳を対象として生涯のキャリア形成に役立つスキルの習得を重視した、キャリア教育・職業教育に関連したプログラム。DPのコースの学習と、キャリア関連学習およびCPの「コア」の4つの必修要件を組み合わせる。そのうちの1つである「個人的技術と職業的技術」は、生徒が将来的に職場で遭遇しうる個人的および職業的なさまざまな状況に効果的に対応するための準備を行うことに焦点をあてる。一部科目は英語、フランス語又はスペイン語で実施。
- 2) IBでは「母語」という用語は、「最初に学んだ言語」、「ネイティブスピーカーとして見なされる言語」、「最もよく知っている言語」、「最もよく使う言語」等のすべての意味を含んで使用されている(国際バカロレア機構, 2014d他)。
- 3) 学校が提供している「言語A」科目に生徒の母語の科目がない場合、学校は生徒のために「学校のサポートの下で行われる自己学習」コースを提供する他、開講できない言語を「特別リクエスト」により国際バカロレア機構に要請することができる(国際バカロレア機構, 2017a)。

- 4) IBのプログラムに関わるすべての生徒、教師、管理職、そして保護者も含めた全員が指標とすべきものとして、「IBの学習者像」という10の人物像が示されている。
- 5) 34点満点の内訳は、「基準A：焦点と方法 6点」、「基準B：知識と理解 6点」、「基準C：批判的思考 12点」、「基準D：形式 4点」、「基準E：取り組み 6点」である。
- 6) 各側面や各領域の間にあるダイナミックな相互作用を否定しているのではなく、あくまでも指導と学習を計画するための参考として分類やモデルが示されている。
- 7) IBの「概念」については国際バカロレア機構(2016b, pp.20-24)と国際バカロレア機構(2016a, pp.18-21)を参照のこと。
- 8) essential understanding, enduring understanding, big idea, generalization などといった用語も用いられている。

引用文献

- 半田淳子編著 (2017) 『国語教師のための国際バカロレア入門—授業づくりの視点と実践報告』大修館書店
- 国際バカロレア機構 『国際バカロレアを大学入学審査に生かす』 Retrieved from <https://www.ibo.org/globalassets/digital-toolkit/brochures/what-is-an-ib-education-2017-jp.pdf>
- 国際バカロレア機構 (2014a) 『母語以外の言語によるIBプログラム学習』 Retrieved from <https://www.ibo.org/globalassets/publications/learning-in-a-language-other-than-mother-tongue-jp.pdf>
- 国際バカロレア機構 (2014b) 『DP：原則から実践へ』 Retrieved from <https://www.ibo.org/globalassets/publications/dp-from-principles-to-practice-jp.pdf>
- 国際バカロレア機構 (2014c) 『「言語A：言語と文学」指導の手引き』 Retrieved from <https://www.ibo.org/globalassets/publications/dp-language-a-literature-jp.pdf>
- 国際バカロレア機構 (2014d) 『IBプログラムにおける「言語」と「学習」』 Retrieved from <https://www.ibo.org/globalassets/publications/language-and-learning-in-ib-programmes-jp.pdf>
- 国際バカロレア機構 (2014e) 『一貫した国際教育に向けて』 Retrieved from <https://www.ibo.org/globalassets/publications/towards-a-continuum-of-international-education-jp.pdf>
- 国際バカロレア機構 (2015a) 『ディプロマプログラムにおける「指導」と「学習」』 Retrieved from https://ibpublishing.ibo.org/dpatln/apps/dpatl/resources/publications/jp/d_0_dpatl_gui_1502_1_j.pdf
- 国際バカロレア機構 (2015b) 『一般規則：ディプロマプログラム』 Retrieved from <https://www.ibo.org/globalassets/publications/general-regulations-dp-jp.pdf>
- 国際バカロレア機構 (2016a) 『MYP原則から実践へ』 Retrieved from <https://www.ibo.org/contentassets/93f68f8b322141c9b113fb3e3fe11659/myp/myp-from-principles-into-practice-2018-jp.pdf>
- 国際バカロレア機構 (2016b) 『PYPのつくり方：初等教育のための国際教育カリキュラムの枠組み』 Retrieved from <https://www.ibo.org/contentassets/93f68f8b322141c9b113fb3e3fe11659/pyp-making-the-pyp-happen-jp.pdf>
- 国際バカロレア機構 (2017a) 『DP手順ハンドブック 2017年5月、11月試験用』 Retrieved from <https://www.ibo.org/globalassets/publications/assessment-procedures->

handbook-2018-jp.pdf

国際バカロレア機構 (2017b) 『国際バカロレア (IB) の教育とは?』 Retrieved from <https://www.ibo.org/globalassets/digital-toolkit/brochures/what-is-an-ib-education-2017-jp.pdf>

東京都教育委員会 (2013) 『国際バカロレア検討委員会報告書』 Retrieved from <http://www.metro.tokyo.jp/INET/OSHIRASE/2013/03/20n3s600.htm>

東京都教育委員会 (2014) 『国際バカロレアの導入に向けた検討委員会報告書』 Retrieved from <http://www.metro.tokyo.jp/INET/OSHIRASE/2014/03/20o3r300.htm>

International Baccalaureate Organization (2013). *Diploma Programme Language B guide: First examinations 2015*. (Published March 2011 Updated September 2013.) Retrieved from the International Baccalaureate online curriculum centre.